

令和7年度第1回瀬戸市生活支援・介護予防サービス提供主体等協議体会議 議事録

開催日時	令和7年7月14日（月）午後2時から午後3時30分まで
参加者	委員：別紙委員名簿のとおり 事務局：高齢者福祉課長、課長補佐、地域支援係長、担当主事
場所	瀬戸市文化センター 21会議室
内容	1 開会 委員の紹介 2 議事 （1）副委員長の互選 事務局より副委員長に伊藤委員を提案。出席した委員に承諾をいただく。 （2）令和6年度瀬戸市施策の報告 【資料1】を基に事務局より説明 ①移動支援事業について、昨年に引き続き道泉・東明・長根連区で実施。 道泉連区に関して、買い物支援を令和6年10月から令和7年2月まで月2回、計10回実施。 東明連区に関して、買い物支援を令和6年11月に1回実施。 長根連区に関して、東名ボールと連携し、ボウリングと食事（交流会）における送迎を令和7年1月に実施。 3ヶ所で合計して94名の参加があった。 ②大人の本気ダンスプロジェクトについて 「瀬戸の情熱」伝道師育成講座を毎月1回、新規講座を毎月2回、サロン講座を毎月2回開催した。新規での参加者は16名。また、市内公民館にて体験会を4月に実施。 ③令和2年度から令和6年度の主な事業の実績回数について 計6事業開催。サロン・まごころを除き、参加者は増加。シニアスポーツカレッジに関して、大学の都合により休止。令和7年度からは実施している。 （3）令和7年度検討事項について 【資料2】を基に第2層生活支援コーディネーターより説明 令和6年度第2・3回の協議体を受けてコーディネーターがまとめた資料である。委員の皆様の意見も反映させていただいた。 項目1.2について、通いの場に対する評価の難しさ、介護予防とのつながりの難しさがある。現在では、評価しきれていないことも課題の一つである。 項目3について、委員の皆様より好きなことや楽しみを取り入れた居場所を活動の場も必要であると意見をいただいた。 項目4について、ICTを活用し、介護予防に取り組むということも委員の皆様からも意見をいただいた。高齢者は情報が入りづらいという実態がある。情報を拾

いやすくする環境づくりが必要である。

項目5について、更に広く周知するにはどうすべきか、今後検討する必要があると考える。

項目6について、多種多様な協力者とどのように連携していくかも課題である。財政的支援は、社協としてはよりどころに対して助成をしている。

今後について、通いの場運営者が安心して継続していくためには、運営者の想いに耳を傾け、必要な支援（サポート）を検討する必要がある。地域の方が居場所を必要と感じてもらうためにはどうしたら良いのか、ここを理解することで参加につながると考える。

【資料3・4】を基に事務局より説明

〔事務局より説明・資料3の説明〕

令和6年度協議体の進捗について報告。

第1回目では、地域ケア会議で挙げられた課題から、どのような地域課題を協議体で取り上げていくのかを検討した。一番多く課題が挙げられた深刻性・広範性が高い部分に着目。①地域の繋がりが不足することで起きる課題②移動の課題の2つに分類した。また、早急な課題解決は難しいものの、課題の深刻性・広範性を少しでも留めていけるよう、第2回協議体の検討事項とした。

第2回目では、第1回で分類した課題を整理し、「通いの場・外出機会の創出」「高齢者の見守り」をテーマにグループ検討を実施。「通いの場・外出機会の創出」では、高齢者が通いの場に参加しやすくなる仕組みやまた参加したいと感じるためには何をすべきかを中心とし検討。「高齢者の見守り」では、どのような見守りがあれば良いのか、またどのような見守りができるのかを検討。

第3回目では、よりどころを実施している方をお呼びし、現場の声や地域の居場所作りの実践効果や見守りについて理解を深めた。

令和7年度協議体の進め方について、資料3を読み上げ。

〔基幹型地域包括支援センターより資料4・追加資料の説明〕

資料4の地域課題整理表では、地域のつながりや移動問題が多く挙げられていた。追加資料は令和6年に実施した地域ケア会議で挙げられた課題を整理したものである。令和4・5年では表の右上が多かったが、令和6年は表の左側（C・D）が増加している。右上は深刻性・広範性が高い課題であった。各地域包括が深堀をしていった結果、令和6年では左下（D）に向かっていったという結果が出てきた。繋がりを深める視点を持つことでDが解決に向かうことが分かった。

〔委員長より配布資料の説明〕

今までの議論の中で高齢者の見守りと合わせて「通いの場」が重要で政策提言の軸である。「通いの場」が実際、介護予防等にどれだけ役立っているのかについて、定量的に測れる指標を使って確認した研究について調べた。「通いの場」とは、「年齢や心身の状態等によって高齢者を分け隔てることなく誰でも参加することがで

き、介護予防などを目的とした活動を行う場」と定義されている。実際に3つに分類できる。①運営：運営主体についてこだわりはない。②場所：個人宅、空き家、空き店舗等様々なスペースを活用している。③活動：様々な類型化のパターンとして挙げている。この3つを基に、資料下部のa～dを満たしたものを「通いの場」としてカウントしている。瀬戸市では、サロン・まごころの3件のみである。瀬戸市の中で約50箇所あると認知しているが、実数とオープンデータとの間に乖離が見られる。人口規模が同じくらいの自治体でも把握の差がかなり大きい。通いの場をいかに認知してもらうのが大切な課題である。国の認知と瀬戸市の認知にも乖離があり、問題につながっているのではないかと。多くの研究において、「通いの場」に参加すると、身体的能力・認知能力・心理メンタル面・社会参加の数字の面で向上が見られ介護予防効果がもたらされているという結果がある。通いの場が地域の高齢者の健康に大きな影響力を持つという点は、学術的な面でサポートされているという実情がある。通いの場について、協議体での考え方をサポートできるものが社会的にも認められているということを報告させていただいた。

〔基幹型地域包括支援センターより意見〕

資料2の1. 2について、瀬戸市健康課・高齢者福祉課・国保年金課で高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施事業を行っており、この取り組みと上手に連携ができないかと感じた。事業立ち上げ当初、健康課や国保年金課から地域の居場所について、基幹型包括支援センターや生活支援コーディネーターに聞き取りがあった。課を超えた連携が必要である。個々のデータを持っている所でないとな上手に活かして行けないし、評価がなかなか難しい部分であると感じたため、協力していけると良いと感じた。

3について、空き家の話もあったが、沖縄県那覇市が別事業で瀬戸市に視察に来た際、話をしていた、居場所・公民館がない地域があるとおっしゃっていた。それであれば、移動式の公民館を作れば良いということで、パラソルと机を運び、そこで居場所作りを実施していた。生活圏域に公民館がない地区では、移動式屋外型公民館を運営している。茶話会や公園清掃活動等を実施し、多世代交流も生まれている。5について、今年度実施された地域ケア会議、本人が外とのつながりが少ない独居高齢者のケースで、各通いの場が色々な方法で周知をしているが、なかなか自分には届いていない。自分自身、認知症事業で様々な地域を回って活動をしているが、周知したつもりであっても、来て欲しい人には届いていない。地域を回って検討するが、その地域のキーマンと繋がり、声かけがないと行こうという気持ちにはならない。参加しても知らない人ばかりであつたらどうしようか、誘われても行って一人だったら嫌だと思つたため、なかなか繋がらない。ボランティアも、誰もが孤独は嫌、人と人を繋げる何かがあると行きやすくなると感じた。周知だけでなく、人と人との繋がりが必要であり、それがあるから居場所に繋がると分かった。

担い手について、一緒に活動しているオレンジサポーターは60代後半から70代前半の方が多い。そのくらいの年齢であると、広く活動しようと思うが、75歳

を過ぎてくると、運転免許証の返納を思い出す。その頃にやっと自分の地域に目が向くようになる気がするとおっしゃっている。自分達の地域のサロンに行き、話をしていかなければならないと話題になった。瀬戸市内には色々な団体・ボランティアがあるが、その方達がさらに高齢で卒業した後の行き先があるともっと身近な部分で活躍し続けられるのではないかと。

〔地区社協会長連絡会より意見〕

基幹型地域包括支援センターの話は良く分かるが、その方をどう繋げるのか。繋げ方について、西陵には地域力があり、センターを運営している。有料で場所を貸し出し、ヨガ・体操は高齢者の参加者が多い。そのため、センターの部屋はほとんど埋まっている。各地域にある通いの場は全体的にどこが把握しているのか、そこをまとめていただけると分かりやすくなるのではないかと。地区社協もサロンを運営しているが、楽しくやっている場所へ一人で入ってくると浮いてしまう。こちらから発信していけるような声掛けができると良い。サロンに一人で入ることができない。一人で入るとするのはハードルが高い。いかにハードルを低くして、協力してもらえるのかと考えていくと良いのではないかと考える。ロコミで一緒に行こうと連れてくるのが一番良い。しかし、サロンの中に入っても、受け身で自己発信できない状態であるため、発信できる人が入ると負担が軽くなる。そういったことを考えていく必要がある。

〔委員長より意見〕

活動しているが、それが国のデータに挙がってこないということは、どこかで情報が途絶えているのではないかと。厚労省が定める通いの場はかなりの数があるのではないかと。

〔瀬戸介護事業連絡協議会より意見〕

有料のものを弾くのではなく、ワンコインで行っている教室も通いの場であると考えて。

〔第1層生活支援コーディネーターより意見〕

今年度作成した「瀬戸市暮らしの便利一覧」の中にも地区社協会長連絡会のサロンを始め、他の地区社協や地域力、地域団体を挙げさせていただいている。公民館や地域交流センターで何を実施しているのかを洗い出す話が挙げられている。市のワンコイントレーニングや認知症カフェ等、委員長の参考資料に基づくと、それら全ては通いの場として該当すると改めて確認できた。地域交流センターを見ていて、決まった講師が定期的に実施しているが、それをきっかけに集まる。社会福祉協議会が実施しているよりどころと変わらないと思う。社会福祉協議会が把握しているよりどころで、約1年間の参加者が15人から40人程度に増えた所がある。隣近所、一人で暮らしていそうな人に声をかけ、よりどころに連れてきていた。それがロコミで広がり、建物に人が入れないくらい集まった。参加者に聞くと、気になっていきたいと思うが、一人では一歩踏み出せないし、知らない人ばかりだと、という話が挙がった。そういった人達への働きかけは必要であると考えて。一番課題で

あると思った点は、一覧を作成しても、これが本当に欲しい人達の手にとれだけ渡っているのかである。情報が行き届いていないから知らないという人が多い。社会福祉協議会に通いの場やよりどころがないかという問合せがあれば、主催者と参加者を繋ぐことができる。情報と行きたいという人への伴走が大きな課題になっていると感じる。担い手について、気づいていない潜在的な担い手がいる。瀬戸市全域では難しいものの、自分の身近な所の担い手になる、そこのつなぎ役が社会福祉協議会の仕事であると考えている。

〔委員長より意見〕

瀬戸市が課を超えて連携すると、「瀬戸市暮らしの便利一覧」の状況に合うものがあるのではないかと。行政もそうであるが、自分自身も呼びかけが必要であると考えている。瀬戸市には潜在的だが、実際活動している団体もたくさんいるが、上手く繋がっていない。第2層生活支援コーディネーターから、よりどころ運営者が集まって悩みを相談したり、打ち明けたりできる場がサポートとして必要であるという指摘があったが、どういう人達が通いの場に貢献しているのか、繋がる場が必要であると考えている。

〔瀬戸市シルバー人材センターより意見〕

通いの場がどこにあるのかが分からない。近所の人も県外の介護施設に通っているみたいだが、そういった人が近くで通えたら良いと思う。団地族はあまり活動が活発ではないと思う。

〔瀬戸市民生委員児童委員協議会より質問・意見〕

デジタルリテラシーとは何か。

陶原公民館でグランドゴルフ等がやっているが、来る人が決まっている。グループが決まっており、そこに入っていくことは難しい。しかし、同じ町内で高齢者がいれば、集まりに連れていけるように訪問することで参加者も増えるのではないかと考える。

〔委員長より回答〕

デジタルリテラシーとは情報活用能力である。

〔基幹型地域包括支援センターより意見〕

第9期総合計画の中に、要支援者と一般高齢者の違いが掲載されている。その中で、要支援者は一般高齢者の2倍外出を控えていたり、要支援者の4割が公共交通機関を使って外出していなかったりということが挙げられている。瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会にて、瀬戸市は重度化予防や介護予防の面で達成されていないというデータが挙げられている。まだ元気な高齢者を対象とした介護予防が多いと感じる。センターで活発にサロンがあるが、そこまで歩いて行かない人はコミュニティバスを使ってまでそこに行くのか。ご近所同士で声をかけて、歩いて行けるくらいで集まらなないと要支援者は参加できないのではないかと。身近な場所で歩いて行ける居場所作りを進めていかなければならないとデータを見て感じた。自分の近くにあれば、隣近所で声を掛け合い、色々な情報が届かなくとも誘い合っていけるので

はないか。サロンの在り方も考えなければいけない。

〔地区社協会長連絡会より意見〕

居場所作りをする時、100mの範囲なら歩いて行けるというのであれば、そこにお茶を飲みに行くでも良いのではないかな。何かやらなければと思い、居場所作りをするのではなく、空いているからお茶でも飲みに来るという方法で行えば良いのではないかな。しかし、そこで担当者を決めてしまうと負担になるため、そこは考慮すべきである。

〔基幹型地域包括支援センターより意見〕

立ち話でも十分だと考える。今の時期は難しいが、例えばゴミ捨て場で立ち話する程度でも良いと思う。ベンチがあれば、そこに座ってお話もできる。わざわざ何かを作らなくても良いのではないかな。そこを上手にコーディネートする人が必要であると考え、地域の人を繋ぎ合わせるための人や生活支援コーディネーター等を増やさないと難しいのではないかな。

〔第1層生活支援コーディネーターより意見〕

春日井市生活支援コーディネーターと話をした際、生活支援コーディネーターが介入して行政と協力することにより、町内に1ヶ所単位でスタートした。生活支援コーディネーターも関わりながら行っているという所で効果が出ている。誰かが伴走してやっていかないと、定年退職した人や普段から家に居らっしゃる人にやってみようと声をかけても動かない。誰か何か一人でやろうと思ってもできない。通いの場・よりどころの参加者の声も集めて、気軽にやれる雰囲気一步踏み出せるような仕掛けをしていきたい。

〔委員長より意見〕

通いの場の活動内容は何でもありである。それぞれ興味あることは異なる。集まって話すだけでも良い。通いの場は簡単に作れて、簡単に辞められて誰かに引き継ぐこともできる。作る時のハードルは低いということも知ってもらった方が良い。東明連区の移動支援で、旧小学校にてボッチャをしたが、運動だけにすると体動く人しか集まらないため、それを眺めている茶話会も行っていた。

今回は政策提言に向けての協議体であるため、今日出た意見を考えていただき、議論をしていきたい。

3 その他

事務局よりスマイルシニアについて説明

4 閉会